

漢字・字喃經典料紙調査概要

東南アジア地域文献の史料論的研究序説

小島 浩之・矢野 正隆

はじめに

文献研究の多くは、テキストの読解を中心とするものであるが、その文献が複製ではない原資料（オリジナル資料）である場合、そこに含まれるメッセージがテキストレベルに限定されないことは、誰もが気づくところであろう。このような、文献からテキスト以外のメッセージを抽出するための手法は、たとえば、日本の古文書学における「様式論」「形態論」といった分野において精緻化されてきた。

ただし、この分野においても記録媒体である料紙そのものを研究する料紙論の確立は、ここ数十年のことである。ましてや、アジア的な視点からの料紙研究は、緒についたばかりといっても過言ではない。

本研究は、日本国内では希少な東南アジア地域の原資料に、古文書学的方法論を適用することにより、これらの持つ豊富なメッセージを多角的に読み取ろうとするものである。ここでは特に料紙研究に力点を置き、この成果を内容研究と表裏一体の成果として位置づけることを目標としている。

折しも、京都大学東南アジア地域研究研究所には、仏典など宗教関連に限定されるもののほぼ未整理のハンノム文献¹⁾が所蔵されている。そこで、本研究では、これらを題材にして、まず、詳細な目録および解題の作成を重点的におこなった上で、古文書学的手法による資料調査を実施している。

2017年度は2017年9月30日（土）～10月1日（日）、2018年2月16日（金）～18日（日）の計5日間にわたって調査を実施した。各調査の参加者は以下の通りである（順不同敬称略）。

第1回調査

清水政明、大野美紀子、小島浩之、矢野正隆、森脇優紀、小山萌、本多俊彦、富田正弘、大川昭典、藤田励夫、都築晶子、古川千佳

第2回調査

清水政明、大野美紀子、小島浩之、矢野正隆、森脇優紀、小山萌、本多俊彦、富田正弘、藤田励夫、都築晶子、古川千佳、高島晶彦、床井啓太郎、鄭美景、岡田雅志

本稿では、概ねまとまった第1回調査分のデータについて、取り急ぎ公表するとともに、これらのデータに対して若干の考察を加え、今後の研究の見通しを述べるものである。

1 対象資料と料紙調査の手法

1.1 対象資料の概要

当該資料群は「在泰京越南寺院景福寺所蔵漢籍字喃本」と呼ばれるものではないかと考えられている。一瞥する限りでは、確かに資料群名が示すように、タイにあるベトナム系の寺院のもののようなものである。このため使用されている料紙には、少なくともベトナムから持ち込まれたものと、タイで漉かれたものの2種があると予測できよう。

表 1 第 1 回調査結果一覧

No.	A	B	C	D	E		F	G	H	I	J	K	L
	文書 番号	枝番	タイトル	形状	法量 (cm) 縦	横	縦横比	厚さ (mm)	繊維	填料	簀目数	糸目幅	刷毛目
1	001		仏説天地八陽 経	冊子	24.8	14.1	縦横=1: 0.57	0.08	竹		30	1.2	○
2	002		慈悲水懺解 卷 下	冊子	25.2	13.1	縦横=1: 0.52	0.07	竹		30	1.6	○
3	066		慈悲水懺法 卷 中	冊子	25.2	13	縦横=1: 0.52	0.08	竹		25	1.5	○
4	003		百歳修行経	冊子	26.7	17.3	縦横=1: 0.65	0.07	楮	少	42	3.6	○
5	004		[二十四孝]	冊子	26.3	19.4	縦横=1: 0.74	0.07	楮	少	25	3	○
6	005		釈氏国音 卷上	冊子	25.2	14.2	縦横=1: 0.56	0.07	竹		25	1.8	○
7	030		釈氏国音 卷中	冊子	25.8	13.7	縦横=1: 0.53	0.07	竹		25	1.7	○
8	039		釈氏国音 卷下	冊子	25.8	13.9	縦横=1: 0.54	0.07	竹		25	1.7	○
9	006	001	戒殺放生文	冊子	25.2	14.2	縦横=1: 0.56	0.05	竹		45	1	○
10	006	002	仏救嬰兒	冊子	25.2	14.2	縦横=1: 0.56	0.06	竹		32	1.5	○
11	007	001	仏説天地八陽経	冊子	26.2	14.1	縦横=1: 0.54	0.1	竹		30	1.6	○
12	007	002	仏説報恩懺法 卷中	冊子	26.2	14.1	縦横=1: 0.54	0.09	楮	少	24	3.3	○
13	008		[三帰依、十善 戒など]	冊子	25.7	14.2	縦横=1: 0.55	0.08	竹		25	1.3	○
14	009	001	[四大色身、新 演血盆正教 経、大孝目犍 連孟蘭盆行]	冊子	25	13.2	縦横=1: 0.53	0.07	竹		36	1.3	○
15	009	002	[固詩浪]	冊子	25	13.2	縦横=1: 0.53	0.07	竹		38	1.3	○
16	010		瀧山大円禅師 警策	冊子	24.7	13.7	縦横=1: 0.55	0.07	竹		36	1.6	○
17	012		金剛般若波羅 蜜経	折本	21	10.3	縦横=1: 0.49	0.09	楮 パルプ				
18	013		金剛般若波羅 蜜経	冊子	23.8	15.9	縦横=1: 0.67	0.09	パルプ				
19	014		仏説金剛経	折本	26.4	80.7	縦横=1: 3.06	0.08	パルプ		34		
20	015		[不明]	冊子	24.1	13.2	縦横=1: 0.55	0.05	竹		30	1.5	○
21	016		関聖帝君[霊]験 籤演義 一本	冊子	24.3	13.5	縦横=1: 0.56	0.06	竹		27	1.5	○
22	017		Vân chū O	冊子	20	14.2	縦横=1: 0.71	0.09	パルプ				
23	018		沙弥律儀要略	冊子	24.9	14.2	縦横=1: 0.57	0.06	竹		36	1.5	○
24	019		瀧山大円禅師 警策文 卷之下	冊子	24.2	13.3	縦横=1: 0.55	0.08	竹		33	1.5	○
25	020		[十戒、三皈依、 発願回向文、発 四宏誓願、求懺 悔文など]	冊子	23.9	12.9	縦横=1: 0.54	0.05	竹		32	1.5	○
26	021		[妙法蓮華経観 世音菩薩普門 品第二十五]	折本	18.3	13.9	縦横=1: 0.76		楮				
27	026		妙法蓮華普門 品	折本	18.1	13.9	縦横=1: 0.77		楮				

ただし、資料は系統立てて分類・整理されておらず、また劣化も相当程度進行している。このため、過去に桜井由躬雄氏が作成した目録²⁾とそのままでは照合すらできず、当該目録と完全に一致する資料群かどうかは、まだ断定できていない。

このため、調査に先立って、京都大学東南アジア地域研究研究所図書室において、対象となる資料について暫定的な目録データの作成が行われた(以下、仮目録とする)。これによれば資料点数は107点で、その多くを仏典が占めるものの、道教および明清時代に興った民間宗教の経典も含まれている³⁾。

ただし、内容と料紙の調査をはじめてみると、破損により同一資料が分断されたため、異なる資料番号となってしまったものも見つかっている。このため確定的な目録の公開は、まだ少し先になるものと考えられる。今回作成の目録を仮目録としたのはこのためである。

1.2 調査手法

料紙調査の手法は、近年、日本古文学書学において提唱されている、外形・表面観察、形状測定、光学観察・測定(非破壊観察)による手法に倣うこととした⁴⁾。

この方法は、「文書料紙について、目で見ると、触るなど、調査者の感覚機能により観察し、法量、重量、厚みなど料紙の物理量を測った上で、顕微鏡やカメラなどの各種光学機器を利用した観察・測定データを加味して、定量的に分析する手法」⁵⁾である。調査者の感覚からの主観的データに偏らず、物理量や光学観察・測定の記録という客観的データを相互に突き合わせて定量化しようとしている点に特徴がある。詳細は章を改めて具体的に述べる。

2 第1回調査の概要と結果

第1回目の調査では27点の資料について調査

を実施した。その主要な観察・測定データについてとりまとめたものが表1である。A欄は、整理前に各文書が収納された封筒に貼られていた番号(外装ラベル番号)である。本調査ではひとまずこれを文書番号として扱っている。文書番号が通番になっておらず、たとえば002の次が066になっているのは、文書番号としては分かれているが、もとは一続きの資料であって一纏めにされていたものである。これらは一括の単位として、表1では網掛けすることで示してある。B欄は1冊の途中で料紙の種類が変化した場合、調査時に文書番号を展開して与えた枝番である。内容細目を示すものではなく、あくまで料紙の相違による区分であることに注意されたい。

この資料群の大半は写本であるが、詳細に見ると、一資料中に複数のタイトルが混在してものも少なくない。したがって、仮目録ではあらゆる箇所から複数のタイトルを拾い上げている。このうちC欄では最も主要な部分をなすものをひとまず掲げた。なお、仮目録ではタイトル不詳となっているものうちいくつかは、第2回調査時に鄭美景氏より指摘を受けたことで今回補うことができた。タイトルの字体は、一部の異体字を除いて原則として常用漢字に統一した。

D欄には資料の形状を、E欄には料紙の縦横の長さを記した。冊子の場合、袋綴(線装本など)であれば半葉、折丁からなる洋装であれば1頁の縦横の最大値を測ってある。折本の場合、一紙分の縦横の最大値を測ってある。冊子では、縦横の比率がほぼ2:1(1:0.5)となっていることがF欄からわかる。料紙の比率は、一般的には裁断したり折ったりする前の全紙の比率に依存しやすい。中国では漢代から長方式という全紙の縦横比が2:1のものがある(全紙の場合は高さ(縦)が1で幅(横)が2となる)ので、表にみられる縦横比2:1の料紙は、中国的な紙の比率を維持している

ものと考えられる⁶⁾。

G 欄には、料紙の厚みを 12 点測定して、その平均値を小数点第 3 位で四捨五入したものを掲げた。シックネスゲージ（ミットヨ：547-301 および 321）を使用し、折本は 1 紙の袖・奥・天・地から、袋綴のものは 1 葉の天・地・ノドから、折丁からなる洋装本は 1 頁の小口とノドから測定した。図 1 からわかるように、547-321 は紙の奥深くまで測定できるタイプであるため、袋綴の内側に差し込んでノド部分を測定するのにも適している。



図 1 シックネスゲージ(左：547-301、右：547-321)

今回の調査対象の大半が竹紙であったこともあり、全体的に 0.1mm 以下の薄い紙が多かった。文書番号 021 と 026 はいずれも複数枚の紙を貼り合わせてあったため、1 紙あたりの厚さの測定はできなかった。

法量と厚さに加えて重量がわかると、料紙の密度を求めることができる。紙の密度は、繊維の種類や加工方法に左右されるため、紙種特定のための傍証データとなり得る。ただし、今回の調査対象の大半は、料紙とは異なる紙によって装幀されているものであったため、料紙 1 枚あたりの重量を正確に測定することはできなかった。

H 欄には、本文料紙の顕微鏡観察により、目視および写真撮影により判定した繊維の種類を記録した。使用機器は以下の通りである。

- 杉藤 TS-8LEN-100WT 顕微鏡（ただし接眼・対物の両レンズを被写界深度の深いものに交換している）

- 接眼レンズに CCD カメラ（レイマー：WRAYCAM NF500）

顕微鏡による観察では、原文書の下から有機 EL パネルを使用して光（透過光）を当て、原文書と顕微鏡の間には、文書への負担を軽減するために間紙を置いた。繊維の識別については、大川昭典「文書紙の繊維組成及び填料の観察」（湯山賢一編『古文書料紙論叢』勉誠出版, 2017）に基づき、宍倉佐敏『和紙の歴史：製法と原材料の変遷』（印刷朝陽会, 2006）、園田直子「素材としての和紙に関する基礎的研究」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第 57 集, 1994）なども適宜参考にした。

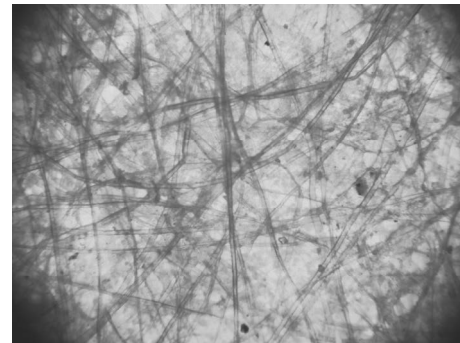


図 2 楮繊維（米粉入）文書番号 007-002

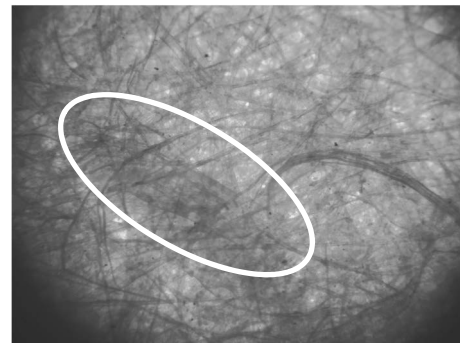


図 3 竹繊維 文書番号 010

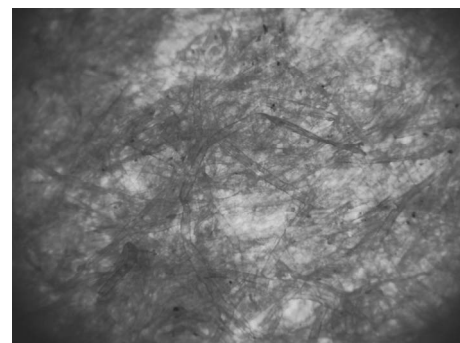


図 4 パルプ繊維 文書番号 014

観察の結果、27点中、18点(約67%)が竹紙、5点(約19%)が楮紙、4点(約14%)がパルプを含む紙であった。今回の調査による代表的な繊維写真を図2~4として示す。いずれも倍率は100倍である。

図2の繊維は、長く幅広で薄膜に包まれており、線条痕や結節が所々に観察され、楮繊維の特徴を備えている。

図3の繊維は、大きな孔紋導管(白丸で囲んだ部分)が観察され、竹繊維であることがわかる。

図4は幅の広いリボン状の繊維や、裁断された繊維がみられる。劣化状態なども勘案するとパルプ繊維であろう。

I欄は填料、すなわち抄紙時の添加物の有無に関する顕微鏡観察の結果である。填料とは、主として紙を白くする目的で入れられるもので、配合された料紙は一般的に白くて不透明性があり、表面は毛羽立ちやすく、柔らかい風合いを持つようになる⁷⁾。

今回の調査では文書番号003、004、007-002の3点の楮紙に填料の混入が観察された。楮繊維の周囲には、小さな粒子がたくさん絡みついて固まって(団粒構造という)おり、繊維周辺部が靄がかかったように見える。これは、個々の米の粒子は半透明であるものの、団粒構造を形成すると光を通しにくくなるためである。今回の例はいずれも米の粒子の量が多くないため、図2だけでは特徴が見いだしにくいかもしれないが、こういった特徴⁸⁾から、使用されている填料は米の粒子だと判断される。

手漉紙の場合は、紙に簧の痕(簧目)や簧の籤を編んでいる糸の痕(糸目)が残る場合がある。これらについて調査したのがJ欄とK欄である。簧目については1寸あたりの本数を目視で数え、糸目についてはその間隔を測定した。

簧目の数や糸目幅は、繊維の種類・地域・時代

によってある程度、決まってくるとされている。東南アジアに関してはこれまでほとんどデータがないため、今後の調査の積み上げによって一定の傾向が出てくる可能性がある。

なお、文書番号012と017は近代の機械製紙による紙のため簧目、糸目はなく、013、021、026には、簧目・糸目が無い代わりに表面に布目のようなものが観察された。

L欄には刷毛目痕の有無について記載した。日本の手漉紙(和紙)の場合、抄紙の際に簧に面する側(簧肌面)が、干板に接する面となり、いわゆる紙のオモテ(書記面)となる。したがって通常は書記面側に簧目・糸目と板目が強く現れ、非書記面の側には干板に貼り付ける際に使用した刷毛の痕(刷毛目)が残る。このため、板目と刷毛目の観察は、紙の表裏の使用や乾燥工程の技術の相違を確認するのに有効な指標となる。

ところで、中国をはじめとする大陸側のアジアでは乾燥に板を使わず、漆喰や土の壁を使用する。このため板目の代わりに壁の細かな凹凸痕が残ることがある(いま仮にこれを壁目とでもしておこう)。今回の調査では残念ながら板目・壁目のいずれも確認できなかった。このため刷毛目と表裏一体の指標である板目・壁目については特に表の一項目とはしていない。ただし、第2回調査でははっきりと板目のある紙が見つかっており、東南アジアの紙の乾燥方法について、今後、検討する余地が多分に含まれている。

刷毛目については、表からわかるように多くの料紙で顕著に確認された。いずれも裏側(非書記面)に強く表れており、乾燥時に板や壁などに接していた側が書記面となる原則は、同じであろうと推察される。これについては第2回の調査でさらに詳細なデータ採取を行っており、現在、分析中である。

以上の各測定や観察は、原則として2紙目以降

で状態のよい紙で行った。

3 若干の考察

今回調査した料紙において特徴的なのは、竹紙の多さである。タイは楮系、ベトナムは沈丁花系(Dó=ゾー)の紙が知られているので、どちらかが主流ではないかと予測していたのだが、全く異なる結果が出てしまった。

ベトナムでも竹紙が生産されていたのではないかと考えられる文献史料は存在する⁹⁾が、確定的ではない。中国から輸入されたものであるのか、ベトナムで抄紙されたものなのか、今後検討する余地が多分にあるであろう。

一般に中国産の竹紙の簀目は35~45本程度と細かいものが多い、これに対して今回の調査では25本前後の粗い簀目の竹紙が散見される。あくまで推測にすぎないが、中国産とベトナム産の相違によるものなのかもしれない。いずれにせよ、今後のデータの蓄積と内容の分析によってこの差については、何らかの意味が出てくると考えられる。

ところで、高島晶彦氏は、ベトナム皇帝の文書料紙や日本の天皇が使用する紙がいずれも沈丁花科の繊維であることは、中国皇帝の使用する三桮紙(三桮は沈丁花科)から影響を受けたのではないかと推測している¹⁰⁾。ここから考えるに、神勅などの皇帝下達文書はゾー¹¹⁾を、経典類は主として竹紙をといたような料紙の使いわけが存在していた可能性も指摘できよう。

先に「013、021、026には、簀目・糸目が無い代わりに表面に布目のようなものが観察された」と述べた。このうち貼り合わせた厚い紙の021と026はおそらくタイで漉かれた経文用紙であると考えられる。

小林良生氏¹²⁾によれば、タイでは網目のスクリーンの簀で紙を漉き、乾いたらその上でさらに漉いた紙を重ねて(抄き合わせ)乾燥時に自然結合

させて、経文用の複層の厚い紙を作るという。これらは、両面書写の折本に使用されるとのことである。021と026が厚く複層からなる紙であること、折本であることは、小林氏の見た紙と類似する。そうであれば、調査で布目と判断されたのは、スクリーン状の網目である可能性が高い。

なお、これは偶然の産物ではあるが、文書番号012は近代の新聞紙で裏打ちが施されている。素人による簡易的な補修で、酸性の新聞紙が保存に悪影響を与えているが、はからずも古い逐次刊行物を保存することになったのは、怪我の功名であった。本紙と分離して保存処置をすることで、近代の印刷仏典の本紙より、資料的価値が出てくる可能性もある。

むすびにかえて

ここまで料紙調査のデータに沿って、今後の展望も含めて縦横に論じてきたが、こういった調査を積み重ねることで、得られた結果は、学術的にどのような活用が可能であろうか。

文書番号007-001の「仏説天地八陽経」は末尾の願文に「天運乙酉年十二月吉日」と書写日がある。この乙酉年について、内容から確定することは難しい。しかし、料紙から近代的なパルプによる製紙が始まる前のものであることは明かであり、19世紀以前のものに間違いない。このため、1885年もしくは1825年に絞り込むことが可能となる。

このように、紙のデータを集積・分析することで、テキストの内容だけからは証明が難しいことに関して、異なる角度から情報を与えてくれるであろう。

今後も継続して調査を行い、データの蓄積と関連諸学への応用に努めたい。

【附記】本稿は、IPCR2017「東南アジア地域文献の史料論的研究：ハンノム文献を中心として」（代表者：清水政明・大阪大学）、JSPS 科研費 17H01834「逐次刊行物データベースを利用したインドシナ3国出版思潮の研究」（代表者：大野美紀子・京都大学）、JSPS 科研費 15H02786『『図書館資料保存論』に関する基礎的研究』（代表者：小島浩之・東京大学）、JSPS 科研費 16K12543「日本の洋式製本の技術伝播に関する歴史的研究：洋

装本資料保存のための基盤整備」（代表者：森脇優紀・東京大学）による研究成果の一部である。

(こじま ひろゆき：東京大学大学院経済学研究科講師)

(やの まさたか：東京大学大学院経済学研究科助教)

- 1) ハンノム (Hán Nôm) とは、漢字 (chữ Hán) チューノム (chữ Nôm) の略で、王朝時代のベトナムにおいて用いられていた文字資料の総称である。1920年代以降、アルファベットに基づく表記 (quốc ngữ) が普及し、一般に用いられることはなくなった。
- 2) 桜井由躬雄「在泰京越南寺院景福寺所蔵漢籍字喃本目録」『東南アジア：歴史と文化』8, 1979。
- 3) 都築晶子氏からのご教示による。
- 4) 具体的には、天野真志・富善一敏・小島浩之「近世商家文書の料紙分析試論：武蔵国江戸日本橋白木屋大村家文書を例として」『東京大学経済学部資料室年報』7, 2017 および本多俊彦「文書料紙調査の観点と方法」小島浩之編『東アジア古文書学の構築：現状と課題』東京大学経済学部資料室, 2018 を参照。
- 5) 前掲註4 天野・富善・小島「近世商家文書の料紙分析試論」p.8。
- 6) 全紙の比率については、富田正弘「中世文書の料紙形態の歴史の変遷を考える」(『歴博』184号, 2014) が中国との関係も含めて興味深い議論を提示している。
- 7) 大川昭典「文書紙の繊維組成及び填料の観察」湯山賢一編『古文書料紙論叢』勉誠出版, 2017。
- 8) 前掲註7 大川「文書紙の繊維組成及び填料の観察」参照。
- 9) 『藍山實録』卷三、平呉大誥「決東海之波、不足以濯其汚、罄南山之竹、不足以書其惡。」、『大越史記全書』本紀卷一三洪徳四年(1473)四月条「敕旨各衙門奏本用竹紙。」ただし、いずれも15世紀の史料である。
- 10) 高島晶彦「明代皇帝勅書の料紙について」小島浩之編『東アジア古文書学の構築：現状と課題』東京大学経済学部資料室, 2018。
- 11) 神勅については、矢野正隆「ベトナムの神勅：九州国立博物館所蔵資料の概要と基礎データ」(『東京大学経済学部資料室年報』6, 2016)、同「ベトナムの誥勅と神勅：古文書学的視点から」(前掲註9『東アジア古文書学の構築』所収) を参照。
- 12) 小林良生「タイ国紙抄き村旅日記抄：タイヤイ族の手抄き紙とラフー族のケン作り見聞記」『百万塔』54, 1982。